

闘病記800冊 探しやすく

松山・県立図書館

同じ病気に悩む人にとって、貴重な情報源となる闘病記。ただ、本の題名を見ただけでは何の病気に関連するか判別できないものも多く、探しにくい。松山市堀之内の県立図書館では、病気のジャンルごとの闘病記を集めたコーナーを設けており、利用者に好評だ。

闘病記コーナーの開設は2009年。ルポルターージュとして置かれ、散在していた書物を集約した。3階一般図書室の「医療・健康情報」内にあり、①がん(悪性新生物)②脳の病気③神経の病気④心の病気⑤骨・関節の病気⑥など10ジャンルに分けて並べている。

蔵書数は書庫内の約2000冊を含め、計約800冊。作家や芸能人など患者家族らが

病気別に分類 ラベル添付

陳列工夫 利用者に好評



書庫内の本を含め、計約800冊の闘病記を所蔵する県立図書館。病気ごとに大別されており、利用者に好評だ—20日、松山市堀之内

闘病体験をつづった話題の新作をはじめ、治療法が確立していない難病についてまとめられた書籍などを集め、少しずつ増やしてきた。

目当ての本が探しやすいよう肝臓がんやうつ病といった具体的な疾患名を記したオリ

ジナルラベルを背表紙に添付しているほか、所蔵するブックリストを作成。昨年は書架をカウンター近くの目立つ場所に移動させた。

陳列の工夫があつてか、「最近、貸し出しが増えてきているようだ」と話すのは司書の

橘可奈子さん(51)。正確な数は分からないとしながらも、がんや認知症に関する本の利用が多く、1人が何冊もまとめて借りる傾向がみられるという。

胃がん手術の前に闘病記を借りたという松山市内の70代男性は「病気ごとに大別されているので見つけやすかった。同じ病気に向き合った人が書いた本を読むことで手術への心構えができ、気持ちも楽になった」と振り返る。

「医療・健康情報」には闘病記をそろえるだけでなく、県内医療機関や患者会などのパンフレットを多数用意。13年からは四国がんセンター(松山市南梅本町)と連携してがんを学ぶ講座も開き、医療情報を積極的に提供している。

橘さんは「古い本になると治療法などが変わっている可能性があるが、闘病記は患者や家族の気持ちに寄り添う存在。つらい思いをしている人に手に取ってもらえれば」と呼び掛けている。(原田茜)